

アイリッシュ・フランケンシュタインと「赤毛同盟」： コナン・ドイルとアイルランド問題

角 田 信 恵

The Irish Frankenstein and “The Red-headed League”: Conan Doyle and the Irish Affairs

Nobue TSUNODA

Abstract

This paper explicates the anxiety of Conan Doyle on the Irish affairs through the analysis of one of his Sherlock Holmes stories, “The Red-headed League.” By reading the image of “The Irish Frankenstein” in *Punch*, May 30, 1882 in this text, we conclude that the author’s sympathy and at the same time fear for his own emasculated father is represented as the red-headed league.

Key words

コナン・ドイル、シャーロック・ホームズ、赤毛、アイルランド問題、フィニアン同盟、モリー・マグワイアズ、トンネル、フランケンシュタイン

「赤毛同盟」とアイリッシュ・フランケンシュタイン

コナン・ドイルの「赤毛同盟」は、ホームズものには珍しく、滑稽なおもむきのある作品だと一般に評されている。実際その通りだろう。依頼人として登場するのは、赤毛同盟の欠員募集の広告に応じて、「名目だけの奉仕」に対して週4ポンドという割のいい仕事にありついていた赤毛の質屋、ジェイベズ・ウィルスンだ。同盟が急に解散してしまったわけが知りたいと大真面目に訴えるこの赤毛の男をまえにして、テキストはホームズとワトスンに大笑いさせている(59)。さらに、その同盟が実体のない組織だと見抜いて、その陰で進行していた事件を解決したホームズには、こう言わしめもする。「あのいささか奇妙なできごとの目的は、あのあまり賢くない質屋を毎日何時間か外へ連れ出すため以外にはあり得なかったんだ。変わった手段ではあったが、たしかに、あれ以上の手はなかったろう」(72)。テキストは、ありえない話を鵜呑みにしてとまどっている赤毛の男を滑稽な存在と読むように、そして赤毛同盟を犯罪のための少々滑稽なカヴァーであったと読むように、読者を誘導しているのである。

一方、ここに「アイリッシュ・フランケンシュタイン」と題する戯画がある。1882年5月6日のこと、アイルランドに着任したばかりの英国のアイルランド相と次官が、フィニアン同盟によって、ダブリンのフェニックス公園で暗殺されるという事件が起きた。この戯画は、フェニックス公園暗殺事件と呼ばれるこの事件をうけて、その月の30日に『パンチ』誌に掲載されたものであった。アイルランド人がフランケンシュタイン博士の怪物になぞらえられたのは、これがはじめて



1882年5月30日の『パンチ』に載った「アイリッシュ・フランケンシュタイン」

盟はフェニックス公園暗殺事件の翌年にはロンドンで無差別爆弾テロを実行しはじめる。同年、ロンドン警視庁捜査部には特別アイルランド部局が設けられる。「赤毛同盟」が執筆・発表されたのは1891年。それは1882年に再結晶化された「アイリッシュ・フランケンシュタイン」のイメージがいまだ人々の脳裏を去らない時代であり、アイルランド人一般が現実に警視庁の監視のもとにおかれていた時代であった。すなわち、アイルランド人がだれしも自らの出自を意識し、アイルランド問題に対する自らのスタンスを自問せざるをえない時代だったのである。

こうした時代背景を意識したうえで、赤毛がケルト系の出自の指標として機能しうることを想起すれば、赤毛同盟という思いつきは、ホームズが言うように、犯人が「相棒の髪の色から思いついたんだろう」(72) といってしまうわけにはいかなくなる。ドイルはカトリックのアイルランド系の両親のもとにエディンバラで生まれている。たしかに彼は1882年にはカトリック信仰を捨てているし、1886年6月にはグラッドストンのアイルランド自治法案に反対して、英国とアイルランドの連合王国関係の継続を主張するユニオニストとして、最初の政治的スピーチをしてもいる (Fillingham 174)。だが、こうしたこと自体が彼のアイルランド問題に対するこだわりのひとつとみることもできる。実際、1843年以来の『パンチ』の代表的な挿絵画家であった叔父のリチャード・ドイルは、1850年に『パンチ』が反カトリック的態度を鮮明にしたとき、その職を辞したのであったし、父のチャールズ・アルタモント・ドイルが1889年から精神病院で書きつけたイラスト入りの日記にはアイルランドのナショナリズムに対する関心が明らかなのである (Wynne

ではない。1843年11月4日の『パンチ』誌にも、同じく「アイリッシュ・フランケンシュタイン」と題して、ダニエル・オコンネルのもと、アイルランド合同撤回を求める非合法の集會に集まったアイルランド人をフランケンシュタイン博士の怪物になぞらえた戯画が載ったし、1860年代にも『トマホーク』誌でフィニアン同盟がその怪物になぞらえられた。むろん、これらの戯画における「アイリッシュ・フランケンシュタイン」が、メアリー・シェリーの原作とはちがって、フランケンシュタイン博士の造った名前をもたない怪物をさしていることは言うまでもない。ともあれ、英国によるアイルランド支配を打倒しようとする運動が英国が生んだ鬼子のようなものとされて、アイルランド人一般がフランケンシュタイン博士の怪物になぞらえられたのだろう。「アイリッシュ・フランケンシュタイン」はヴィクトリア朝中期のユーモア雑誌においてはちょっとしたクリーシェだったのである (Malchow 34-35)。フィニアン同盟

4：22-23)。

「赤毛同盟」は『シャーロック・ホームズの事件簿』所収の作品を除くホームズものの短編のなかで、ドイル自身の自薦リストで2位に入っているし、エラリー・クイーンの大傑作探偵小説選でもポーの「盗まれた手紙」に次いで2位を占めている。にもかかわらず、これまでこのテキストのはらむ政治的意味を問題にした議論はなされていない。本稿はこのテキストをアイルランド問題を視野に入れて分析しようとする試みである。そのときおそらくわれわれはこの一見滑稽なテキストが「アイリッシュ・フランケンシュタイン」に対するドイルの屈折した意識の表明と化す現場に立ち会うであろう。

地上の穴と地下の穴

赤毛の男、ジェイベズ・ウィルソンが語る赤毛同盟をめぐる物語は、彼の店の地下でくわだてられている犯罪の正確なメタファーとなるように仕組まれている。それらはともに、穴についての物語と読むことができる。

ウィルソンは赤毛同盟の空席 (vacancy) をうめ、『大英百科事典』を最初から書き写す⁽¹⁾という「名目だけの奉仕」によって、法外な報酬を得たと思っている。だが、ホームズが見抜いたように、それは逆説的にも、彼の店に彼の不在 (vacancy) を生ぜしめるための、彼の使用人のたくらみであった。一方、この不在を利用して、この使用人は店の地下室でトンネルを掘りすすんでいる。すなわち、今ひとつの vacancy をせせせと生ぜしめている。さらに、ウィルソンが彼自身の思い込みで反して、彼の vacancy に対して「三十ポンドあまり」(61)の報酬を得ていたなら、この使用人はトンネルという vacancy によってシティ・アンド・サバーバン銀行の地下室に保存されている3万枚のナポレオン金貨をねらっている。実際、ウィルソンに与えられた「名目だけの奉仕」の内容も暗示的だ。1768年から刊行された、英語の百科事典として、最大、かつもっとも総合的な『大英百科事典』は、英国の知の集大成といえる英国の知的財産だ。それを機械的に筆写するという行為は、英国の知を剽窃する行為であり、英国の知の空洞化をたくらむ行為にはかならない。このテキストにおける犯罪は穴にまつわる犯罪なのである。

テキストはこのふたりのアイデンティティ自体をも穴 (vacancy) との関係で規定する。ホームズものにお決まりの、ホームズが最初に依頼人の素性をあてる場面で、彼はウィルソンが中国に行ったことがあることを当ててみせる。彼が時計の鎖につけている「四角い穴のあいた小さな金属」(51)が中国のコインだし、彼の手首の刺青にも中国独特の色付けがされているからだ。(シャーロキアンたちはこのコインもこの刺青の色も日本のものであったはずだとしているが、ウィルソンがホームズの推理が当たっているとやっている以上、ここではそれらは中国のものであったとしておこう。) ここで重要なのは、ウィルソンが「穴のあいた」コインを身につけており、皮膚に穴をあけて、そこに色をつけていることだ。一方、彼の使用人のヴァインセント・スポールディングがじつはジョン・クレイという大悪党だとホームズが見抜くのも、彼が耳にピアスの穴をあけているという情報にもとづいている (61)。テキストはウィルソンの「穴のあいた」コインという箇所にも、クレイの場合の「ピアスをあけている」という箇所にも、ともに “pierced” という語を当てている。それによって、ウィルソンとクレイの属性とされる穴をひとつにくくり、地上と地下におけるふたりの行為が同一の行為であったことを、わかる人にはわかるといったレベルで示唆するのである。ホームズがウィルソンの「名目だけの奉仕」の内容をあててみせるのは、上着の左袖の「ちょうど机にあたる肘の部分にすべすべしたつぎがあたって」いることによるもので

あったし(51)、クレイの犯罪を確信するのも、彼のズボンの「膝のあたりがすり切れて」いることによるものだ(75)。前者の上着には店にあげた穴に赤毛同盟の仕事というつぎが当てであるし、後者のズボンにはもう少しでトンネルという穴があきかけている。

ウィルスンとクレイが同時にテキストに登場することは一度もないし、ホームズがウィルスンの店のドアをノックしたとき、ウィルスン自身は店に帰っているはずなのに、テキストは彼がノックに答える可能性をまったく排除している。だからといって、むしろウィルスンはクレイであったというわけではない。むしろ、彼らの地上と地下という配置は、クレイをウィルスンの潜在意識とする読みを促すだろう。クレイは「カメラを持ち出して撮りまくっては、…地下室へ降りて行って現像をする」(53)。彼は意識の世界で起きたことを地下の無意識の暗室にためこんでいるのである。一方、ウィルスンが赤毛同盟に応募したのは、なかばはクレイに「給料を払うため」であった(53)。と同時に、ウィルスンが赤毛同盟から得ていた報酬はもとはといえばクレイが出したものであったはずだ。この金の流れはリビドー経済のメタファーと読める。赤毛同盟の解散に困惑してホームズを訪ねてきたウィルスンは、地下からのリビドーの補給がとだえたことに困惑している神経症患者であった。彼の物語は地下で起きている犯罪の症状だったのである。

検閲するホームズ

まずは依頼人がホームズのもとにやってくる。物語は彼もしくは彼女の訴えをきいたホームズが、「真の物語」を直線的な語りによって語ることができたときに終わる」(ジジエク100)。多くのホームズものがまさに精神分析的なテキストをなしていることは、単純にこうしたプロットのレベルに限ってみても、明らかだろう。そうしたなかでも、このテキストは特権的なテキストだ。たとえば、高山はこう述べる。「[フロイトは] 推理小説の探偵と全く同じことをやっているのである。それは、地上にある人間の人格は地下にある「無意識」なるものがコントロールしているという発想である」(高山206)。この言葉にもみてとれるように、意識と無意識、もしくは潜在意識を地上と地下として説明するのは、それらを空間的に説明するにあたっての常套手段だからだ。ウィルスンが彼の物語を語っているあいだに、ホームズはそれが「ウサギが穴に滑り込むみたいに地下室へ降りていく」(53) 使用人についてのテキストであることを、すなわちウィルスンの潜在意識についてのテキストであることを見抜いて、その男についてウィルスンに詳しい説明を求めている。彼はまた、ステッキで舗道をたたいて、トンネルがどこにむかって掘られているかを調べてもいる。ブランドリンガーは19世紀末のイギリスの心理学はフロイトの精神分析と同じようなかたちで潜在意識の働きに関心をよせていたと述べる(Brantlinger 241)。このテキストにおけるホームズは、まるで精神分析医でもあるかのように、地上にあらわれたスクリーンを通して地下の潜在意識がいかなるかたちをとっているかを調べるのである。

だが、ホームズが語る「真の物語」を、われわれはこのテキスト全体の「真の物語」であったとするわけにはいかない。地下で行われている犯罪を表象する赤毛同盟がはらむ意味を不問に付すとき、彼は地下で行われている犯罪の真の意味をも不問に付しているからだ。このテキストにおいて、意識と潜在意識は垂直方向だけでなく、水平方向にも空間化されている。ホームズといっしょにウィルスンが営む質屋の周辺を調べにきたワトソンはこう記す。

裏町のサクス＝コウバーク・スクウェアから角を回って出た通りは、まるで一枚の絵の裏と表のような、まったく対照的なところだった。この通りは、シティを北部と西部へつなぐ大

動脈のひとつである。車道は往き来する車でできる二つの大きな流れにふさがれ、一方、歩道のほうも急ぎ足の歩行者の群れで黒く埋まっていた。美しい商店や立派な事務所が並ぶ光景をながめていると、これがいま見てきたばかりのあのくすんだ、みすぼらしい広場と背中合わせになっているのだとは信じ難かった。(64)

意識が地上にあって明るいもの、潜在意識が地下にあって暗いものとする比喩がなりたつならば、シティを貫いて走る大動脈のような通りを意識の世界とし、その通りの裏のみすぼらしい広場を潜在意識の世界とする比喩もなりたつはずだ。クレイのトンネルは、みすぼらしい広場に面するウィルソンの質屋の地下室から、表の大動脈のような通りに面する英国でも有数の銀行の地下室へと掘られている。トンネルから出てくるクレイを待ち伏せるホームズは、ウィルソンの潜在意識の検閲官として機能しようとしているのである。

ホームズが「穴はすべてふさいだわけだ」(70)と言うのは象徴的だ。ウィルソンとクレイのアイデンティティが穴との関係で規定されていたなら、穴をふさぐホームズはテキスト全体の父の座を占めている。実際、穴をふさぐという行為自体がきわめてファリクな行為であることは言うまでもない。テキストはこうしてホームズに「真の物語」の顕在化を阻止させることによって、この物語の全体を滑稽なものにおしとどめようとしているのである。

子宮をもった父

穴をふさぐのが父の役割なら、穴をもっていることは女であることの指標であろう。ウィルソンの潜在意識にみとれる物語は、そしてホームズが顕在化することを阻止した物語は、きわめてクイアな物語をなしている。

ウィルソンとクレイの穴は彼らが男でない男であったことを示唆している。ウィルソンの中国のものとされる刺青は、彼が中国人に穴をあけられた痕跡にほかならないし、クレイの穴は、若いころ、ジブシーにあけてもらった穴だ(61)。ここでジブシーが一般にアジア起源の民族だと考えられてきたことと、当時の一般的な人種観が、西欧が自らのうちにかかえる男色などの自然に反するとされた欲望を西欧の他者としての東洋に投影していたことを考えあわせれば、彼らの穴の性的含意は明らかだ。東洋人によって穴をあけられたこれらの男たちは、東洋人との男色行為において女の役割をしたのであり、東洋人に汚染された、東洋人のように倒錯した存在だったのである。ドイルは耳にピアスの穴がある男を「ボール箱」においてその男が女のような男であることのサインとして再登場させているとローゼンバーグは指摘する(178)。実際、トンネルから出てきたクレイの手は「白くて女っぽい手」だし、彼に次いで出てきた相棒も、また穴に飛び込もうとしたところを警官に「上着の裾をつかまれ、服がびりびり裂ける音が」する(71)。ここでの上着の「裾」には「skirt」という語があてられて、この相棒もまた女のような男であることが示唆される。このテキストにおいて、地上は地下のスクリーンであった。ウィルソンの刺青はクレイのはっきりと貫通した穴としてあるピアスの痕跡だ。ウィルソンの刺青は魚のかたちに彫られていた。魚には「まぬけなやつ」という意味がある。テキストは、魚の刺青によって、ウィルソンがまぬけな男であることを、すなわち自分が女のような男であることに無意識な男であることを示唆しているのである。

だから、ウィルソン自身は赤毛同盟の空席という穴をふさいだと思っている。すなわち、自分の店において父の座にあると思いきんでいる。むろんのこと、女のようなこの男は、現実の子ど

もをもちえない。だが、彼が「年配の紳士」(49)なら、クレイはいまだ一人前ではないことのサインとして、「顔にはひげがありません」(61)、「ひげをきれいにそった若い男」(63)、「ひげのない質屋の店員」(66)などと、ひげがないことが強調される。テキストはさらにウィルスンに「わたしは家内に先立たれて、家族というものがおらんのです。わたしたちは三人でひっそりと暮らしています」(53)と言わせて、彼とクレイと、それにテキストが一度しか言及しない14歳の女中とが、一種の擬似家族を成していることをほのめかす。クレイは「仕事を覚えるため」(53)と称してこの店にやってきたのであったし、ウィルスンが赤毛同盟の欠員募集に応じたのは、クレイに給料を払うためであった。ウィルスンはこうして自分を息子を養う父の位置におくことによって、彼の失われた男性性を補填しようとしているのである。

だが、この父の座は逆説的なかたちでしか成立しない。クレイがウィルスンの店にやとわれてきたのは、そもそも赤毛同盟にこの男をやとい、彼が占めるはずの父の座に穴をあけさせるためであった。これが比喩的にはレイプであったことは明らかだろう。この父の座は潜在意識下の息子によってあけられた穴によってしか成り立ちえない。こう言ってもいいだろう。父の座の空白を利用して、クレイはせっせと銀行へとトンネルをほっている。すなわち、かつて穴をほられたウィルスンは、その潜在意識下で今度は穴をほり返しているのである。だが、その穴は彼自身をほり返す穴でしかないのだ、と。息子を養う父の位置にあったウィルスンは、女の下半身をもった父としてあったのである。

ローゼンバーグは、ウィルスンの店とその地下室が男の下半身を表象しているとして（そう考えれば、ウィルスンが不思議なことに一度も地下室に降りていかないのも納得がいく）、銀行の地下にある金貨＝糞便に到達しようとするクレイの行為に男色強姦の寓意を読みとっている（223-236）。だが、ウィルスンの地下室は「男の下半身」というよりは、女の下半身をなしている。ひげのない、小柄なクレイは、しょっちゅう「ウサギが穴に滑り込むみたいに地下室へ降りていく」(53)。ウサギはむしろ有袋類ではないものの、ここにみてとれるのは有袋類のイメージだ。父の座をレイプしたクレイは、今や胎児として父の子宮にはらまれている。とすれば、クレイの銀行泥棒＝銀行に対するレイプの企てとは、父の子宮のなかの胎児が父の産道＝トンネルを通過して生まれようとする企てだ。男性性を補填しようとするウィルスンの企ては、男による単性生殖というかたちで実現しようとしているのである。

泥のフランケンシュタイン、もしくは赤毛の繁殖拡張

実際、クレイがトンネルから現れでる場面は、赤ん坊の誕生の場面と読むことができる。ホームズはワトスンや警官や銀行の頭取といっしょに、真っ暗な銀行の地下室で待機している。そこに敷石の割れ目から一筋の光が差してきたかと思うと、「いきなり、音もなく床に割れ目ができたかのように見え、なかから一本の手があらわれ」る(70)。その手はいったんは引っ込むが、

すぐに何かは裂けるような音がして、大きな白い石がはね起こされ、四角く口を開けた穴からランタンの光が流れ出てきた。そして穴の縁から、目鼻立ちの整った若者らしい顔がのぞき、あたりを鋭く見まわした。彼は穴の両わきに手をかけると、肩のところまで姿をあらわし、ついで腰のあたりまであらわし、とうとう片ひざを縁にかけた。次の瞬間には彼は穴のそばに立っていた…。(70-71)

クレイ (Clay) という名前は泥を意味する。神が泥からアダムを創ったように、そして自らを神になぞらえて新しい人間を創り出そうとしたフランケンシュタイン博士のように、ウィルスンは女によらない生殖を企てていたのである。おそらく、ここに読み取ることのできるフランケンシュタイン博士の怪物のイメージに関して、ドイルは意図的だ。赤毛同盟の事務長はダンカン・ロスと名乗っていた。グリーンが指摘するように、このファースト・ネームもラスト・ネームも『マクベス』に登場する名前だ (Green 319)。そして『マクベス』は「女の腹から生まれた奴には不死身だ」(五幕八場) というマクベスをめぐる物語であった。

だが、ひるがえって考えてみれば、ウィルスンは、ほかならぬ、赤毛同盟の目的に忠実だっただけではないか。赤毛同盟は「赤毛の人間を保護するのももちろん、その繁殖拡張も目的としている」(57)。にもかかわらず、赤毛の「男性」(52) にしか応募資格がない。ウィルスンが独身だということで、いったんはその採用に難色を示した赤毛同盟の事務長は言う。「あなたのようにみごとな髪の毛をお持ちの方には、むりにでも一步譲らねばなりません」(57)。地上における物語は地下において現実化される。「みごとな赤毛」をもったウィルスンは、赤毛の繁殖拡張を、しかも女を排除した繁殖拡張を企てたのである。クレイはたしかに赤毛ではない。だが、彼がトンネルから引き上げたあとに続く仲間とは——そしてこの仲間というのはダンカン・ロスと名乗った男と同一人物であろう——「初めの男と同じようにきゃしゃで小柄な男で、顔は青白く、乱れた髪が真っ赤」であった (71)。赤毛同盟とは、フランケンシュタイン博士の企てのように、女によらない生殖を目的とした組織だったのである。

西欧において赤毛は伝統的に負の指標であった。だから、『聖書』のなかの弟を殺したカインやキリストを売ったユダも赤毛とされている (ド・フリース 306)。そうした伝統は赤毛の人間の「繁殖拡張」をおぞましいものとせざるをえない。このテキストは1891年に出版されている。フランス・ゴルトンが悪質な遺伝形質の淘汰と優良な遺伝形質の保存増加についての学問、優生学を提唱したのは1883年。優生学の帰結として、ナチによるユダヤ人のホロコーストが起きるのはまだ先のことだ。だが、そうした時代思潮は赤毛の人間の繁殖拡張の現場の、そして赤毛同盟のおぞましさを倍化させる。ここで「アイリッシュ・フランケンシュタイン」にならって、フランケンシュタイン博士の怪物をフランケンシュタインと呼ぶならば、泥のフランケンシュタインが生まれようとするまさに「その瞬間、ホームズはさっと飛び出すと、侵入者の襟首をぐいっとつかまえた」(71)。彼はこうして赤毛の人間の繁殖拡張をおしとどめ、「真の物語」を封印しおおせる。とすれば、こうも言えるだろう。ポーの「盗まれた手紙」にならって、テキストは、そしておそらくドイルは、そのもっとも隠しておきたいものを、赤毛同盟という、テキストのもっとも見えやすいところに隠したのだ、と。

ユダヤ人の扶助組織

テキストはこの同盟をまずはユダヤ人の組織を含意するものと読むよう、ほとんどあからさまに読者を誘導している。この同盟は「アメリカ合衆国ペンシルヴェニア州、レバノンの、故イジーキア・ホブキンズ氏の遺志にもとづく」(52) ものとされている。レバノンが『聖書』においてたびたび言及される山の名であり、ペンシルヴェニア州のレバノンもその山の名にちなむ町名なら、イジーキア (Ezekiah) という名前も「列王記2」18章から20章に出てくるユダヤの王、ヘゼキア Hezekiah に由来する。同じく、ウィルスンのファースト・ネーム、ジェイベズ (Jabez) も、『旧約聖書』の「歴代誌1」4章9節に登場する名前だ (Green 315)、ヘブライ語起源だ。さらに、イジー

キア・ホプキンズがウィルスンに『大英百科事典』を筆写させたなら、ヘゼキア王はおおぜいの律法学者をやとって、『聖書』の正確で決定的な写しをはじめて作ろうとした王であったし、ジェイベズはヘゼキア王の写生字たちが住んでいた町の名でもあった（ローゼンバーグ187）。ホプキンズは「ロンドンを振り出しに身を立てたんで、なつかしいこの町に恩返し」をしたかったのだとされる（55）。1880年から1910年代にかけて、英国には30万人の東欧系ユダヤ人が渡来した。そのうち20万人はアメリカを最終目的地としていたもの（佐藤 219）、彼らは深刻な移民問題をひきおこし、「東欧系ユダヤ人移民の入国制限を求める要求が……一八八七年以後、選挙運動の際に、政治的プロパガンダとして利用され始め」ていた（佐藤 220；渡会 141-144をも参照のこと）。ホプキンズが英国からアメリカに移住した20万人のひとりであり、「自分も赤毛だもんで、世の中の赤毛の人にすっかり同情してしまった」（54）としても、不思議ではなかったのである。ウィルスンが鉤鼻だという描写はない。だが赤毛鉤鼻というのはステージ・ジューの典型であったし、彼は金貸しのユダヤ人という、これまたステージ・ジューの典型通りに、質屋を営んでいる。

こうした読みからこの質屋の周辺の地理学を見直せば、このテキストのユダヤ人に対する偏見にみちた側面がうかがいあがる。この質屋は英国でも有数の銀行と背中合わせになっていた。このわびしい質屋で起きることは、英国経済を握っていたロスチャイルド家のようなユダヤ人の金融業者の潜在意識下で起きている。さらに、この質屋の住所は、コウバーグ・スクウェア、もしくはサクス＝コウバーグ・スクウェアとされている。ヴィクトリア女王の母はザールフェルトのサクス＝コウバーグ家の出であったし、アルバート公もサクス＝コウバーグ＝ゴータ公家の出身だ。いわば王室に面してあるこの質屋は、英国の首相の座についたただひとりのユダヤ人であり、ヴィクトリア女王に愛されたディズレイリの潜在意識の表象でもある。ディズレイリといえ、ロスチャイルド家の融資によって、スエズ運河株を取得し、大英帝国に大きな貢献をしたことで有名だ。むろんどこまでがドイルの意図であったかはわからない。だが、スエズ運河も大陸と大陸とのあいだにあげられた今ひとつのトンネルであった。ユダヤ人男性は、その割礼の習慣から、さらには金に金を生ませる金融業にたずさわる者が多かったことから、女のような男であり、さらに比喩的には女によらない生殖をたくらむ者というイメージでとらえられていた。実際、ドイルが影響を受けたマコーレイは、ユダヤ人排斥運動を推進するには、赤毛の人間を全員、政治的に弾圧すればよいという趣旨の発言をしているのである（Barsham 113に引用）。

だが、赤毛同盟（Red-headed League）という言葉自体が、それがたんなる扶助組織にはとどまらないであろうことを暗示する。Reform League（1865-69）、Home Rule League（1873）、Land League（1879-1881）、Irish Nationalist Ladies' League（1881-82）、Primrose League（1883）など、当時のさまざまな政治団体の名称が示すように、同盟（league）という語は政治的な結社にこそふさわしいものであったからだ。（したがって、本稿では、従来「赤毛連盟」もしくは「赤髪組合」と訳されているこのテキストの表題を、「赤毛同盟」としている。）さらに、テキストの暗示のレベルは、この同盟が秘密結社であったであろうことをほのめかす。ホームズはウィルスンに彼がフリーメイスンの会員であることを当ててみせる。驚くウィルスンに彼は言う。「あなたは、厳格な団体規則にそむいて、弧とコンパスの胸飾りピンをつけていらっしゃいます」（51）。フランス革命やアメリカの反英独立闘争に大きな役割を担ったこの秘密結社のバッジを表向きにつけている迂闊なウィルスンは、赤毛同盟についてホームズに訴えている迂闊なウィルスンだ。秘密結社が比喩的な意味での地下組織なら、トンネルを掘るためのカヴァーとしてあった赤毛同盟は、実体的な意味での地下組織のカヴァーだったのである。

モリー・マグワイアズとフィニアン同盟

山本は「赤毛」と「質屋」という特徴は、そのままアイルランド系とユダヤ系を連想させると指摘する(15)。実際、テキストは赤毛同盟がユダヤ人の組織であるかにみせかけながら、その実、それがアイルランドの独立をめざす秘密結社として想定されていたであろうことを、随所でおわせるのである。

高橋によれば、『赤毛のハンドブック』なる1984年出版の少々ふざけた本によると、赤毛人口は世界最多のスコットランドで人口の11パーセント、アイルランドで10パーセント、イングランドで5パーセントを占めるとされるし、ほかの統計でもスコットランド系が10パーセントという数字があるそう(5)。むろん、こうした数字は、ユダヤ人の場合と同じく、現実のものというよりは、むしろ表象のレベルでケルト系の人々に付与された負の指標でしかないだろう。ともあれ、ウィルソンよりもっと「髪の毛が赤い」(56)赤毛同盟の事務長は、ダンカン・ロスというケルト系の名を名乗っている。さらに、その同盟の発足者が「合衆国ペンシルヴェニア州」の住人であったとするテキストの設定は意味深だ。地代支払いを拒否し、その支払い命令を送達する官吏を威嚇することを目的として、1845年にアイルランドでモリー・マグワイアズという秘密結社が結成された。モリー・マグワイアズというこの秘密結社の名称は、1865-77年ごろ、労働条件の改善を求めてテロ行為をさかんに行なった「ペンシルヴェニア州」のカトリックのアイルランド系鉱山労働者の秘密結社の名称ともなったのである(詳しくはWynne 37-41)。ドイルはのちのホームズもののひとつ、『恐怖の谷』(1915)でこの組織をモデルに使っている。クレイはまさに炭鉱労働者のようにトンネルを掘っていた。それに、モリー・マグワイアズという名称は、それらの秘密結社のメンバーがしばしば女装したところから、つけられたものであった。

だからといって、赤毛同盟=モリー・マグワイアズと同定できるわけではない。イジーキア・ホプキンスの英国からアメリカへという移住ルートは、ユダヤ人よりもはるかに多くのアイルランド人がたどったルートであった。そして、彼らとともに、アイルランド独立運動もアメリカに伝播した。そうした組織の最大のものが、前述のフィニアン同盟だ。1858年にニューヨークで結成された秘密結社、フィニアン・ブラザーフッドと、それと同時期にダブリンで結成された秘密結社、アイリッシュ・リパブリカン・ブラザーフッドの総称としてのこの組織は、「テロ行為も辞さなかった。アイルランド共和軍(IRA)のテロ活動に武器や火薬を提供したのも、もっぱらアメリカのアイルランド人であった。…アメリカとアイルランドの間には、共和主義を志向する反イギリス、反大英帝国のネットワークもまた、多様に結ばれていたのである」(井野瀬 104)。赤毛同盟の欠員募集の広告が載ったのは、1890年4月27日付けの『モーニング・クロニクル』紙であった(52)。1769年に創刊されたこの新聞は1862年に廃刊されているから、テキストにおけるそれはもちろん架空の新聞だ。だが、現実の同紙は、グラッドストーンが——1881年にアイルランド土地法を成立させ、86年にはアイルランド自治法案を提出して政権の座を追われたグラッドストーンが——一時期編集にたずさわった新聞であった(Green 318)。

ダンカン・ロスが赤毛同盟の事務所の家主にウィリアム・モリスと名乗っていたことの意味もここにある。1883年にロンドン警視庁捜査部に特別アイルランド部局が設けられたことは、すでに述べたとおりだ。その部局は、すぐにその監視の対象を、アイルランド人以外の外国人や無政府主義者、さらには社会主義者にまで広げていた(Fillingham 164)。1886年2月8日には、ウエスト・エンドで社会主義者による暴動も起きている。社会主義が自由主義のイデオロギーに対する

脅威となっていたこの時代において(同 173)、工芸美術家であると同時に社会主義者であったウィリアム・モリスの名前は、アイルランド独立のための秘密結社の事務長の隠れ蓑にぴったりだったのである。それに、否定的なイメージのまわりついていた赤毛を美しいものとして描き出したのは、主としてダンテ・ゲイブリエル・ロッセッティの功績であったが、モリスはロッセッティと同じく、ラファエロ前派の一員でもあった。

アイリッシュ・フランケンシュタインの誕生

ドイルの脳裏において、赤毛同盟はモリー・マグワイアズでもあった。だが、さらに直接的には、それはフィニアン同盟であったと言えるだろう。クレイの逮捕の現場はシティの銀行だ。そして、シティはスコットランド・ヤードの管轄外だ。にもかかわらず、ホームズはその現場にスコットランド・ヤードの警官を呼んでいる。そして、テキストはその警官に「わたしはロンドン中のどの悪党よりもこいつ [クレイ] に手錠をかけてやりたいと思っています」(67)と言わせている。1883年のフィニアン同盟による無差別爆弾テロで、下院にしかけられた爆弾を取り除こうとしたスコットランド・ヤードの警官2名が殺傷されている。彼がそう思うのももっともだったのである。クレイは「ウサギが穴に滑り込むみたいに地下室へ降りていく」(53)。この描写は、穴に滑り込むウサギのあとを追って、アリスがウサギの穴に落ちる、『不思議の国のアリス』(1865)の冒頭の場面を想起させもする。そして1882年『パンチ』誌の「アイリッシュ・フランケンシュタイン」を描いたのは、ほかならぬ、『不思議の国のアリス』の挿絵で名をなしたジョン・テニエルであった。クレイによって質屋の店にあけられた穴は、アイリッシュ・フランケンシュタインを生みだす穴だったのである。

トンネルから出てくるクレイは、まさしくアイリッシュ・フランケンシュタインとして生まれようとしている。トンネルを掘ることによって彼がねらっていたのは、銀行の地下室に保管されているナポレオン金貨だ。当時の英国人の侵略恐怖をあおりたてる大問題であった英仏トンネルの計画(詳しくは丹治を参照のこと)を思い出させずにはおかない企てである。だが、英国からの独立をめざすアイルランド人からすれば、英仏トンネルがはらむ意味はまるでちがってくる。古くは1796年のこと、ユナイテッド・アイリッシュメンという結社は、イギリス海軍の目をのがれて、フランス兵士1万5千人を乗せたフランス軍艦をアイルランドの沖合いに手引きしている。1815年にワテルローの戦いでナポレオン軍が敗れるまで、アイルランド人には「ナポレオン率いるフランス軍がイギリス軍を破ってアイルランドを解放してくれるとの期待」があったという(井野瀬 95)。ウィルソンはその潜在意識下で、フランス軍によるアイルランドの解放という過去に潰えた夢を今いちど実現しようとしていたのである。ウィンは「モリアーティの悪の秘密結社はフィニアン党をモデルにしている」と述べる(Wynne 53)。だが、モリアーティのいまだ登場していないこの時点において、クレイはモリアーティに代わって悪の秘密結社を、すなわち赤毛同盟を率いている。赤毛同盟とはアイリッシュ・フランケンシュタインの誕生を目的とする組織であった。アイリッシュ・フランケンシュタインの誕生はホームズのおかげで阻止されたとして、ワトソンはホームズに言う。「君は“the race”の恩人だよ」(74)。ここでの“the race”は一般に「人類」と訳されている。だが、われわれがみてきたテキストの含意からすれば、この言葉は「国民」=英国国民と解釈されるべきだろう。そもそも、3万枚のナポレオン金貨を盗もうとするクレイの犯罪に対するものとすれば少々大仰なこの言葉は、赤毛の人々の繁殖拡張を阻んだホームズには、妥当なものであったと言えよう。

そう、赤毛の人々の繁殖拡張を阻んだホームズには。もちろんアイリッシュ・フランケンシュタインの誕生はおぞましい。だが、赤毛の人々の繁殖拡張というイメージはさらにおぞましい。こういうことだ。『パンチ』誌に載った「アイリッシュ・フランケンシュタイン」はあくまですでに誕生した英国の鬼子を描いている。それに対して、赤毛の繁殖拡張というとき、その力点はアイリッシュ・フランケンシュタインの誕生にいたる経過へと、父の子宮にはらまれた息子というよりおぞましいイメージへと移行する。ここにおいて、テキストはおそらく意図的だ。テキストは赤毛同盟＝フィニアン同盟に、前述のように、伝統的に女によらない生殖のイメージがはっきりとつきまとっていたユダヤ人の組織を重ねあわせているのだから。アイルランド人とユダヤ人は、ともに英国のうちなる他者として、英国人男性のアブジェクトなものを、すなわち彼らのうちなる女性性を担わされてきた。だからむしろアイルランド人にも女によらない生殖のイメージはあった。ブラム・ストーカーの『ドラキュラ』（1897）のようなゴシック小説にそうした含意をみてとり、それをアイリッシュネスと関係づける議論はなされてきているし、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』（1922）において、ユダヤ人であるレオポルド・ブルームがアイルランド人の表象とされていることを、そしてまた彼が息子を亡くして、代理の息子を探しもとめる父であったことを思い出してもいい。おそらく、英国の支配下あるアイルランドの作家にとって、男性性の回復のためにも、父祖の地としてアイルランドを表象するためにも、息子を得るというテーマは切実なテーマであったと言えよう。とすれば、こう言える。テキストはアイルランド人にユダヤ人を重ねあわせることによって、アイルランド人作家にしばしば見られる女によらない生殖というイメージを敷衍して、父の子宮にはらまれた息子というよりおぞましいイメージを、あくまで暗示のレベルではあっても、浮上させたのだ、と。

むしろ、ドイルはフィニアン同盟をそれと同定するような物語を書くこともできた。彼は実際、「あの四角い箱」（1881）と「危機一髪——ある見習い航海士の物語」（1886）というホームズもの以外の短編でフィニアン同盟をはっきりそれと名指して扱っている。前者は、フィニアン同盟員の爆弾がはいた箱ではないかと思われた箱が、実は伝書鳩を入れた箱であったという落ちで終わる物語だ。後者では、ヨットで遭難した少年と少女が、1868年の蜂起に失敗して、フランスへ逃亡中のフィニアン同盟員に救助される（詳しくは前者については Wynne 29-30を、後者については Wynne 27-29を参照のこと）。とくに後者はフィニアン同盟によるロンドン無差別爆弾テロが実行されたあとに発表された作品であるにもかかわらず、フィニアン同盟員が救出者として描かれている。こうした短編におけるフィニアン同盟と、このテキストにおける赤毛同盟との落差は大きい。息子をはらんだ父というウィルソンの深層心理を扱った精神分析的なこのテキストは、おそらくドイル自身の深層心理とかかわる精神分析的なテキストとしてある。

テキストの裏切り

ホームズはヴィクトリア朝の男性性の規範の擁護者だ。だが、そうしたホームズ自身がそうした規範からの逸脱者でもあることはバーシャムに詳しい（Barsham 98-139）。このテキストにおいても、それはその通りだ。テキストの暗示のレベルは、クレイの犯罪を未然にふせいだホームズが今ひとりのクレイでもありえたことを示唆するのである。

このテキストはクレイにはふたつの名前を、ダンカン・ロスには三つの名前を与えている。このテキストのイデオロギーからすれば、Aでもあり、Bでもあるし、Cかもしれない彼らのありようは、彼らが犯罪者であることのサインにほかならない。一方、ホームズは穴をふさいで、銀行

を質屋から、AをBから切り離す。とすれば、テキストがそのホームズにこの事件の捜査の途中でわざわざ音楽会に行かせ、それによって、彼もまた、Aでもあり、Bでもある存在であることを読者に印象づけようとしていることの意味は大きい。ワトソンは音楽会での彼の様子をこう描写する。

優しい微笑みを浮かべた顔や、ものうげな夢見心地の目は、あの警察犬のようなホームズ、冷徹にして鋭敏な探偵ホームズのものとは、とても思えなかった。彼の特異な個性の中では、二種類のまったく異なる性質が交互に存在を主張して現れる。(64)

さらに、ものうげなホームズから鋭敏な探偵としてのホームズへの移行を描くのに、テキストは出産のイメージを用いている。ウィルソンの訴えをきいたあと、彼は「パイプでたっぷり三分の問題だな」と有名な台詞をはき、「椅子のなかで身体を丸め、…鼻の先へやせた膝をもち上げ」る(62)。これが胎児の姿勢であることは言うまでもない。おまけに彼はこの姿勢で、指ならぬ、パイプを吸っている。さらに、そうした姿勢から起きなおると、彼には珍しく地下鉄で(63)質屋に向かう。この質屋がこのテキストの水平方向における潜在意識であることは、すでに述べたとおりだ。彼はトンネル＝産道を通して、ウィルソンの潜在意識の世界へと、参入するのである。だから、ホームズがクレイをつかまえたとき、彼らは対等なものとして、互いの腕を賞賛しあう。「なかなかうまくやったな。ほめてやるぜ。」「こちらこそ。赤毛同盟の思いつきなんかは、じつに奇抜で効果的だった」(71)。ウィンは、シャーロックという名前は古英語に由来するイングランドの名前だが、シャーロック家はアングロ＝ノルマンによるアイルランド侵略以来の、アイルランド化された名家であったと述べる(Wynne 55)。実際、シャーロック(Sherlock)という名前は、シェイクスピアの『ヴェニス商人』のなかのユダヤ人、シャイロック(Shylock)を想起させずにはおかないし、ホームズは鷲鼻とされているのである。

さらに、鈍重なウィルソンと利口なクレイという関係は、そのままワトソンとホームズの関係想起させる。むろん、ワトソン(Watson)とウィルソン(Wilson)の名前の類似も示唆的だ。彼らはともにJ.W.という頭文字をもっている。ウィルソンがクレイを生み出したと言えるなら、ホームズをめぐる物語の語り手としてのワトソンはホームズを生み出したと言ってもいい。名探偵としてのホームズは英国のうちなるアブジェクトなものを排除しようとする。だが、そのホームズ自身が、英国のうちなるアブジェクトなものを体現しているのである。

ドイルは『わが思い出と冒険』のなかで、「もし誰かがシャーロック・ホームズであるとするなら、それは私であることを告白しなくてはならない」と述懐している(ローゼンバーグ 110に引用)。とすれば、彼はこうも言えたはずだ。「もし誰かがクレイであるとするなら、それは私であることを告白しなくてはならない」。ホームズと同じく、ヴィクトリア朝の男性性の規範の擁護者として、そしてまた英国の大義の擁護者として闘ったドイルは、自らのうちにホームズ＝クレイをかかえていたのである。

不在の父

ウィルソンがはらんでいるクレイとは、ドイル自身であった。ドイルの生まれた家において、父の座が機能不全を起こしていたことは、最近のドイル伝においてはすでに常識になりつつある。17歳でアイルランドからスコットランドにわたってきたドイルの父、チャールズ・アルタモント・

ドイルは、スコットランドのある種の生真面目さになじめなかったようだ。彼は次第に酒におぼれるようになり、アルコール依存症からアルコール離脱症候群による激しい振戦譫妄を起こして、1879年3月から入院生活を送るようになっていたのである。ドイル自身のこの不在の父は、ウィルスンと同じく、男性性を喪失した、いわば子宮をもった父であった。だが、この不在の父がクレイの偽名に書き込まれていることの意味は大きい。ヴァインセント・スポールディングというクレイの偽名は、この父親が秘書をしていたエディンバラのセント・ヴァインセント・ド・ポール・ソサイアティから思いついたものかもしれないとグリーンは指摘する (Green 319)。実際、その通りだろう。Spaulding という姓にも、セント・ヴァインセント・ド・ポール・ソサイアティのポール“Paul” という語が含まれているし、聖ヴァインセント・ド・ポールがパリのふたつの孤児院のために金を集めて、それらを建設した聖人であったなら(ローゼンバーグ222)、クレイは「コーンウォールで孤児院を建てるといって」金をだましとったりもしている (67)。たしかに、クレイ=ドイルは子宮をもった父にはらまれた息子であった。同時に、このクレイ=ドイルとは、ドイル自身の潜在意識がはらんでいる、彼自身の不在の父でもあったのである。

とすれば、「赤毛同盟」におけるアイリッシュ・フランケンシュタインの生成が赤毛の繁殖拡張というおぞましいイメージで描かれていたことも、納得がいく。前述のように、この父親はアイルランドのナショナリズムに強い関心を抱いていた。さらに、当時の医学はアルコール依存症を遺伝するとしていたから、ドイルが遺伝性疾患に対する不安を抱えていたということはよく指摘される。アイリッシュ・フランケンシュタインの生成とは、ドイルにとって、彼自身のうちなる父の顕現と同義であった。フィニアン同盟を赤毛同盟として描くとき、テキストはアイルランドのナショナリズムと「遺伝性」疾患がドイルの無意識において分かちがたく結びついていたことを暴露させているのである。

おそらく、こうした事情は「赤毛同盟」に限ったものではない。実際、最初のホームズもの、『緋色の習作』(1887)におけるモルモン教団はフィニアン同盟のメタファーと読むことができる (Wynne 53-54)。ドイルはホームズものと同時期に、彼自身が「まじめな」文学作品と考えていた一連の歴史小説を執筆していた。とすれば、そうした作品ほど構えずに書いたホームズものにドイルの無意識がより見やすいかたちで現れていても当然だろう。すなわち、ホームズものはドイルのうちなる父に対する不安がドイルに書かしたものであった。こう言ってもいい。夢見がちなドイルの父親に対して、医学の道にすすんだドイルという関係は、鈍重なウィルスンと利口なクレイの関係に重ねあわせてみることができる。さらに、それはそのままワトスンとホームズとの関係を想起させる。ウィルスンがクレイを生み出したように、そしてワトスンがホームズを生み出したように、ドイルのうちなる不在の父こそが、ドイル=クレイ=ホームズを、すなわち、われわれがホームズものの作者として知っているドイルを生み出したのだ、と。とすれば、彼がホームズを殺そうと試みた理由も、納得がいく。ローゼンバーグはドイルがフランケンシュタイン博士のように、彼の被造物、ホームズを破壊したいと思っていたとして、彼の「最後の事件」に『フランケンシュタイン』の影響を読み取っている。1893年はじめ、ドイルはジュネーヴから東の氷河に向けて、フランケンシュタイン博士と彼の怪物がたどった道をたどり、それと同じ道をモリアーティに追われたホームズにもたどらせたというのである (64; 94-5 をも参照のこと)。ホームズものに自らの父に対する不安が投影されていることを認識したドイルは、ここにおいて彼自身のうちなる不在の父を殺そうとしたのである。

先に挙げたドイルの言葉は、こう言い換えることができる。「もし誰かがシャーロック・ホーム

ズであるとするなら、それは私の不在の父であることを告白しなくてはならない。」「最後の挨拶」(1926)において、ドイルは変装したホームズに、父の名のミドルネームであるアルタモントと名乗らせている。ホームズとはドイルの倒立した〈父の名〉から生み出された偶像だったのである。

* 本稿におけるコナン・ドイル「赤毛同盟」からの引用は、Doyle, Arthur Conan. “The Red-Headed League.” *The Adventures of Sherlock Holmes*. Oxford: Oxford UP, 1993によりページ数を記し、アーサー・コナン・ドイル「赤毛組合」『新訳シャーロック・ホームズ全集：シャーロック・ホームズの冒険』（光文社、2006）における日暮雅通氏の訳を使用させていただいた。ただし、本稿においては「赤毛組合」という題名は「赤毛同盟」とした。また、一部訳語を変えた部分がある。

注

- (1) 『大英百科事典』を書き写すというアイデアについて、グリーンはオリヴァー・ウェンデル・ホームズの『朝の食卓の専制君主』（1858）のなかの *New American Cyclopaedia* をAの最初から暗記している男についての挿話をもとになっているのではないかと推測している（Green 314）。ドイルは「このアメリカ人学者は自分の文学のインスピレーションのもとになると述べていた」し（スタシャワー105）、シャーロック・ホームズのホームズという名前自体がこのアメリカ人からつけたものだという指摘もある。だが、それよりさらに確実だと思われるのは、職を退いたふたりの書記が百科事典『グラント・ラルース』を丸写ししていくが、徒勞に終わるといふ物語、ギユスターヴ・フローベールの『ブヴァールとベキュシェ』（1881年刊）であろう。実際、テキストの最後をしめくくるのは、ホームズによるフローベールの引用——「人間は無——仕事こそがすべて」（98）なのである。

引用文献

- Barsham, Diana. *Arthur Conan Doyle and the Meaning of Masculinity*. Aldershot, Burlington USA, Singapore, Sydney: Ashgate, 2000.
- Brantlinger, Patrick. *Rule of Darkness: British Literature and Imperialism, 1830-1914*. Ithaca and London: Cornell UP, 1988.
- Doyle, Arthur Conan. “The Red-Headed League.” *The Adventures of Sherlock Holmes*. Oxford: Oxford UP, 1993.
- Fillingham, Lydia Alix. ““The Colorless Skein of Life”: Threats to the Private Sphere in Conan Doyle’s *A Study in Scarlet*.” Harold Orel ed. *Critical Essays on Sir Arthur Conan Doyle*. New York: G. K. Hall, Toronto: Maxwell Macmillan Canada, 1992.
- Green, Richard Lancelyn. “Explanatory Notes.” Arthur Conan Doyle. *The Adventures of Sherlock Holmes*. Oxford: Oxford UP, 1993.
- Malchow, H. L. *Gothic Images of Race in Nineteenth-Century Britain*. Stanford: Stanford UP, 1996.
- Wynne, Catherine. *The Colonial Conan Doyle: British Imperialism, Irish Nationalism, and the Gothic*. Westport, Connecticut, London: Greenwood Press, 2002.
- 井野瀬久美恵『大英帝国という経験』講談社、2007。
- 佐藤唯行『英国ユダヤ人：共生をめざした流転の民の苦闘』講談社、1995。
- シェイクスピア、ウィリアム「マクベス」小津次郎訳『世界文学大系12 シェイクスピア』筑摩書房、1959。
- ジジェク、スラヴォイ『斜めから見る：大衆文化を通してラカン理論へ』鈴木晶訳。青土社、1995。
- スタシャワー、ダニエル『コナン・ドイル伝』日暮雅通訳。東洋書林、2010。
- 高橋裕子『世紀末の赤毛連盟：象徴としての髪』岩波書店、1996。
- 高山宏『奇想天外・英文学講義：シェイクスピアから「ホームズ」へ』講談社、2000。
- 丹治愛『ドラキュラの世紀末：ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』東京大学出版会、1997。

ド・フリース、アト『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他訳。大修館書店、1984。

山本里美「アイルランド性」小林司・東山あかね編『シャーロック・ホームズ大事典』東京堂出版、2001。

ローゼンバーグ、サミュエル『シャーロック・ホームズの死と復活：ヨーロッパ文学のなかのコナン・ドイル』

小林司・柳沢礼子訳。河出書房新社、1982。

渡会好一『ユダヤ人とイギリス帝国』岩波書店、2007。

